

おおさか
KEY
ワード
第51回



「自給自作の農作業」
食糧難で自分たちで食料を育てた。丸太ん棒橋を肥たんごをかついで渡る。「時空の旅」の連作には、都会の子どもたちが慣れない農作業をする様々な姿がユーモアをまじえて描かれている。

この体験は後の世に残さなければならぬ

浄化されていった苦しい思い出

大阪では、大坂落城400年をはじめ記念の年が目白押しである。しかし、半世紀以上が過ぎ、若い人に戦争は遠い昔話にしか聞こえないかもしれないが、今年が「学童集団疎開70年」であることにも目を向けるべきだろう。昭和19(1944)年、都市の爆撃から子供を避難させる「学童集団疎開」が実施され、全国で40万人以上が疎開した。沖縄の学童など800名が乗船する対馬丸がアメリカの潜水艦に撃沈された悲劇でも知られる。

戦争を体験した世代…といっても当時、小学生であった人たちもすでに70歳代の後半になっている。高齢化とともに「記憶」を風化させずに次世代へ、次々世代へと語り伝えなければという使命感が強い。4月には『大阪春秋』No.154号が「国民学校と学童集団疎開70年」を特集し、9月はじめには、学童疎開の体験者であるイラストレーター成瀬國晴さんの強い思いがこめられた「学童集団疎開70年 成瀬國晴個展『時空の旅』」が、なんばパークスで開催された。

成瀬画伯は、南海難波駅に近い日本橋3丁目に生まれ、戦前の濃厚な大阪の街の雰囲気や文化芸能の香りのなかで成長された。作家の故藤本義一さんと親交あつく、読売テレビ「11PM」、関西テレビ「ノックは無用!」の出演や、阪神タイガース選手や力士、落語家などのイラストでも有名である。

画伯は、難波の精華国民学校(後の精華小学校)3年生のときに学童疎開を体験した。9歳の時である。昭和19年8月31日、6年から3年までの414人が同小学校に集合し、疎開先の滋賀県へと出発した。成瀬少年の向ったのは東押立村(現在の東近江市)の東方寺である。大阪市の疎開は区で行き先が違い、

画伯たち東、北、南、浪速の4区46校の学童約13,500人が滋賀県に疎開した。他の区も大阪府下をはじめ和歌山、奈良、京都、徳島、香川、愛媛、石川、福井、広島、島根などの府県に疎開した。

個展は出発から昭和20年秋の帰阪までを77点の作品で構成する。都会の子がはじめて農村生活するなかで、五右衛門風呂や屋外の便所のこと、家が恋しく脱走する仲間を探しにいったこと、食べ物の苦勞、防空壕をつくったこと、八日市飛行場の戦闘機^{はやおさ}隼とグラマンが空中戦になり、隼がグラマンに体当たりして落ちてきた思い出など、当時の少年の視線を大切に、抜け落ちた記憶を求めて、現地取材や慎重な考証も重ねることで描ききっている。

御神輿歳で日向ぼっこ中に大阪が空襲で焼けたことを聞いた《大阪が消失した日》など、空中から見おろした構図に、ぼつねんと腰かけた少年を描き、三人のデリケートな表情に胸を突かれる。一人は笑っているが、あとの二人の沈んだ顔は…。

戦後20年が過ぎたころから画伯は、終戦記念日に疎開先を訪れるようになった。訪問を重ねるごとに現地の友人もでき、疎開当時の「苦しい思い出は徐々に浄化されていった」という。

78歳の画伯の強い思いが、力作ぞろいの作品に結実した感銘深い展覧会であった。『学童集団疎開70年画集 時空の旅』(たる出版)も刊行され、「大阪市公立国民学校学童集団疎開」などの資料も付されている。

使命感をもって、忘れてはいけない体験を語り伝えてくれる人生の先輩たちに感謝するとともに、これを大きな財産として受けとり、将来に伝えることは後の世代に託された使命である。